

天の海に 雲の波立ち 月の船

星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

柿本人麻呂歌集 卷七・一〇六八

夜が暗い。当たり前
のことですが、私には
新鮮な発見でした。職
場の周囲は夜になると
真っ暗になり、晴れた
夜には月明かりが皎々
と輝いて見えます。本
当に、美しい風景だと
思います。

万葉ひとも、天に輝
く月を歌によってさま
ざまに描きました。そ
の中でも私が最もまし
いと思うのが、今回の
歌です。この歌は、天
空を海に、雲を波に、
月を船に、そして星を
林に見立てています。
夜空をパレットのよう
にして詠まれた、絵画
的な一首です。

この「月の船」とい
言葉は、「万葉集」では
全部で3首に詠まれ、
漢字本文では「月船」
と表記されます。この

やまと
万葉がたり

「月船」と同じ意味の
「月舟」という言葉が、
奈良時代に成立した日
本最古の漢詩集である
「懷風藻」の文武天皇
の詩にも詠まれていま
す。漢詩の言葉である
ことから、中国渡来の
漢語であると予想され
るのですが、実はこの
「月舟(船)」という熟
語は、万葉びとたちが
見ていたと思われる古

代中国の文献にはみら
れない言葉なのです。
古代中国では、月に
桂が生えていると考え
られ、月と桂は縁語的
に捉えられています。
また一方では「桂舟」
という漢語が存在しま
す。これらの「月桂」
「桂舟」という漢語が
の世にともなう、万葉集の歌
員・大谷歩

古代日本にもたらさ
れ、月・桂・舟とい
言葉の連想から、古代
中国にはない「月舟」
という新しい漢語が創
作されたのではないか
と思われる。そして
この漢語は「月の船」
(泉立万葉文化館研究
員・大谷歩)

「訳】天上の海には雲の波が立ち月の船が
星の林に漕ぎ隠れていくのが見える。

たとと推測されます。
万葉集の時代に、す
でに漢語が創作される
段階にあったかもしれ
ない。このことは、古代
の人びとの文学レベル
の高さを示すと共に、
万葉集が漢の世界と交
流しながら成立してき
たことを物語るもので
す。万葉集は和と漢の
融合によって、新しい
世界を創り出していっ
たのだと思います。

|| 原則、隔週掲載

人皆は 萩を秋と云ふ 縦しわれは

尾花が末を 秋とは言はむ

作者未詳 卷十・二二一〇

ようやく、私の一番好きな季節がやって来ました。万葉びとたちも、秋の季節をこよなく愛していました。さて、秋の植物といえば、秋の植物といえは何か思い浮かぶでしょうか。山上憶良は「秋の野の花を詠める」と題して「秋の花尾花葛花罌粟の花 女郎花また藤袴朝顔の花」(巻八・一五三八)と詠んでいます。憶良が筆頭に挙げているように、「万葉集」の秋を代表する花は萩で、最も多く詠まれた植物でもあります。また、萩は鹿と取り合わされることがあり、大伴旅人は「わが岡にさ男鹿来鳴く初秋の花爛問ひに来鳴くさ男鹿」(巻八・一五四一)と、男鹿が萩の花を妻として妻問ひに

やまと
万葉がたり

来て鳴くことだ、と詠んでいます。萩と鹿は、万葉びとたちが好んだ秋の風物詩でした。万葉びとたちに大人気だった萩ですが、今回の歌の作者は、萩は萩よりも尾花(ススキ)の方が好ましいのだと宣言しています。流行に便乗するのが嫌いな私は、他人とは違った趣味を披露するこの斜

に構えた作者に、とても好感を持ちます。万葉びとにも個性があり、一人ひとり違った感性があることに気がかされる一首です。この作者はあまのじゃくのようにもありませんが、視点を変えてみれば、他人とは違う感性

【訳】人は皆、萩のよさを秋だという。たとえそうでも、私は尾花の穂先のよさをこそ、秋といおう。

「末」は先端や枝先のこと、穂先のふわふわとした花穂のことを指しています。奈良県には曾爾高原など、ススキの名所がありますね。

万葉びとにもさまざまな好みや季節の楽しみ方があったことでしょう。みなさんも、秋の隠れた良さを見つけてみませんか。

(県立万葉文化館研究員・大谷歩)

|| 原則、隔週掲載